第3回環境問題シンポジウムの開催にあたって

土木学会環境問題小委員会委員長　川口　士郎

第3回環境問題シンポジウムを50年8月22日，23日の両日に亘って開催することになり，関係者の1人として，その趣旨を簡単に述べてごあいさつに変えたいと思います。

1昨年，第1回環境問題シンポジウムを開催して，以来毎年1回開催するようになりました。関係者のもっ若干の不安にもかかわらず，このシンポジウムは一応定着したようであり，発表者，参加者も予想を上廻ることとなり，加えて発表内容も着実に高度化し，嬉しさをかくすことができません。もっとも，今この文章を書いている時点では，第3回シンポジウムの参加者の数はわかりませんので，多数参加されるであろうというのは，私の心からの願いであります。

環境問題というのは，古くて，新しい，いつの時代でも人間の知識と努力を要求する問題であると思います。例えば，ガリバー旅行記を書いたJ.スウィフトのものに，陽光を求めるイギリス国民のため，太陽光線を瓶につめて，貯わえておき，暗い冬の日に放出する技術を研究している学者を述べたものがあるそうです。スウィフトにすれば，学者と環境問題との結びつきを主眼に書いたものではなく，間のぬけた学者の研究をあざけるためであったと考えられますが，本人も心づかずにこのようなことを書いたのは，大変おもしろく思えます。すべての科学技術は結局のところ人類のためであることから，環境問題の解決に何等かの関係があるといっても，さんざらまったくの虚言であるとも思えません。

環境問題なぞを考えなくとも，人間のやることは，神の御手にすべてをにぎられ，なるようにしかならない。こういう考え方に立って，自分がやるべきだと考えることを誠実にやっていけば，万事うまく行く，という風な態度も立派なものだと思います。環境問題を見すえて，その解決に真正面からとり組むという態度も，自分がやるべきだと考える対象がたまたま環境問題であるということのちがいだけで，前述の調和的な物の考え方に帰着するものかもしれません。

環境問題という言葉を，わかったものとして，気楽に使っておりますが，この言葉の意味を画定することは困難というより，むしろ不可能というべきだと私は思います。公害対策基本法に，生活環境という言葉が出ています。そして，この言葉には定義をしておりません。一方，この法律では公害の定義を下して，公害の生ずるフィールドとしての生活環境を考えているようであります。すなわち，生活環境を考えるというよりは，そこで起る現象に着目してその対策を考えている。

環境とは何ぞや，という風な設問は，実際問題に何等の寄与もせず，空虚なものと私は思います。したがって，環境問題とは何ぞや，という風な設問も，大同小異の空漠なものと解しております。私の理解する環境という言葉は前述の法律の含意するものと同じであります。もっとも人により考え方はちがうもので，機会あるごとに，この種の議論をたたかわせ，互いの観念を確かめ合うのは，まったくの無駄であるとも思えません。

さて，この環境問題シンポジウムは発表論文を求める会告にありますとおり，環境を定量的に把握することを大きな方向としております。このことは，言葉をかえていえば，環境というフィールドに生起して，人の生命，健康に関係のある事象を定量的に記述することであります。こういうと，包含される事象は広範にわたります。しかし，そうであっても，主催者が土木学会であることから，自然に現状においては，何ほどかの枠がはめられることになりましょう。それで十分であると私は考えております。

このシンポジウムが今後ますます発展するように，関係者一同も努力しますが，土木学会の会員をはじめ多くの方々の協力と援助をお願いする次第です。雑然としたことを書きました。論文集の前書としてなどうかとも思いますが，高りあるところをおくみとり下さるようにお願いします。